

破滅予定の悪女ですが、
天使な双子の継母になったので
心を込めて育てます！

Character

ランベルト・ルシア

王立魔術院の院長。
優秀な魔術師だが、
なにやらロレンツ家に
興味を持っているようで……

アルダン

ラディルとリセルの家庭教師。
王立魔術院から派遣されている。

ディアン・ロレンツ

ロレンツ侯爵家の当主。
ラディルとリセルを遠縁から引き取る
国王直属の筆頭魔術師。
初夜の日にメリアーナを拒絶するが、
メリアーナを見る目はどこか優しい。

ラディル

ロレンツ侯爵家の養子。
光属性の魔力を持つ。
『ロレンツ家の双子』の
主人公の一人。

メリアーナ・ロレンツ

カレント公爵家の長女。
初夜を拒絶された瞬間、自分が小説
『ロレンツ家の双子』の悪女継母に
転生したことを思い出す。
双子の幸せを守るため、
継母として愛情深く育てることを決意。
絵を描くのが得意。

リセル

ロレンツ侯爵家の養子。
闇属性の魔力を危険視され、
孤独に暮らす。
『ロレンツ家の双子』の
主人公の一人。

目次

破滅予定の悪女ですが、天使な双子の
継母になったので心を込めて育てます！

7

番外編 絵本とピクニック

273

番外編 子どもたちと優しい未来

291

破滅予定の悪女ですが、
天使な双子の継母になったので
心を込めて育てます！

第一章 最低な夫と可愛い双子

「俺に近づかないでくれ」

初夜——結婚したばかりの夫、ディアン・ロレンツ様は、そう言って私から目を逸らした。まるで心臓に刃を突き立てるような冷たい声。

（初夜にこんなことを言うなんて、冷酷だという噂は本当だったのね）

私は声が震えてしまいそうになるのを必死で抑えながら、口を開いた。

「——私たちは、夫婦になったのでしょうか？ どうして近づくことすらだめなのですか？」
お飾りの妻だとは、理解していたつもりだ。

でも、初夜すらなければこれから先、この屋敷で私の立場はない。

「それが君のためでもある。その代わり、金は好きなだけ使っていいし、自由に過ごしていい」
ディアン様の言葉から感じたのは、私に対する明確な拒絶だけだった。

「それから、一つだけ守ってもらいたいことがある」

「何でしょうか……」

（ここまで蔑ろにしておいて、まだ何かあるのかしら……）

訝しく思いながら、彼がこの先にどんな言葉を口にするのか、なぜか知っている気がした。

【地下室にだけは近づかないように】

「地下室にだけは近づかないように」

心臓が、ドクリと嫌な音を立てる。

ディアン様が口にしたのは、想像とまったく同じ台詞だった。

彼が言葉を発するより先に、何を言われるかがわかったのは、単なる偶然なのだろうか。

（違うわね……どこかで読んだことがある？）

そう確か、このあとは【ディアンはメリアーナを置いて寝室から去ってしまった】と続くはず。

「何か、聞きたいこともあるのか？」

ディアン様が眉間にしわを寄せ、不機嫌そうに質問してくる。

「いいえ、かしこまりました……」

焦燥感ばかりが増すのに、頷くことしかできない。

ディアン様は、ロレンツ侯爵家の若き当主であると同時に、この国にたった一人しかいない国王直属の筆頭魔術師だ。

一方私は、魔力を持たない落ちこぼれ。しかも社交界では男遊びばかりしている【悪女】だと噂されている。

「仕事を残している。君は先に寝ていてくれ」

「……はい」

扉が閉まり、私は夫婦の部屋に一人取り残された。

（ちよっとだけ、あり得ない期待をしてみただけ。お飾りの妻でも、家族としての関係くらいは作れるかもしれないって）

冷たい涙が頬を伝い、床へと落ちていった。

実家のカレント公爵家でも、居場所なんてなかった。

でもしかたがない、私は【悪女】なのだ。

「違う……私は、悪女なんかじゃない」

（遊び歩いているのは妹たちで、私は屋敷から出してすらもらえなかったのに）

私は家族から魔力がない無能だと馬鹿にされて育った。

婚約が決定してからは、社交界でカレント公爵家がロレンツ侯爵家に厄介者の長女を押しつけたという噂が流れたけれど……

——それは真実ではない。私は本来、年老いた高位貴族の後妻になるはずだった。

だからディアン様から婚約の申し込みがあった日、私だけでなく家族全員が驚愕したのだ。

「ほかに愛する人がいるのかしら。悪女で魔力なしの私なら、お飾りの妻として利用するのにちょうどよかったのかも……」

私たちの結婚式に参列したのは両親と妹と、彼の義理の息子であるラディルだけだった。

今までだって、家族からはいない者のように扱われてきた。

冬でも部屋の暖炉に薪がくべられることはなく、使用人たちからの嫌がらせで、かびたパンや腐ったスープが出されることすらあった。

「きつと、今までの生活よりはましよね。いつそ、遊び歩いて本当の悪女になったっていいはずよ」でも本当の【悪女】になったら小説と同じ展開になってしまう。

（さっきから、ノイズみたいに聞こえてくるのは一体何なのかしら……）

ディアン様に冷たい言葉を投げかけられてから、何かがおかしい。

このままではいけないという思いが、どんどん強くなっていくのだ。

（そういえば、このお屋敷の中には【あの子】がいるはず）

私は、ぼんやりと扉を見つめた。

結婚式の日、ディアン様の家族として参列していたのは、銀色の髪に金色の瞳を持つ可愛らしい少年だった。

少年の名前は【ラディル】……そして、もう一人の子どもの名は【 】。

私は首をかしげた。ディアン様から紹介されたのは、五歳になる義理の息子ラディルだけだった。

（おかしいわ……どうしても子どもがもう一人いるような気がする）

喉が渇いてしかたがない。侍女を呼ぼうかと悩んだけど、初夜に放置されていることを知られるのは嫌だった。

いずれにしても明日になれば、隠し通すことはできないけれど……

「自分で水を取りに行こうかしら……」

私は夫婦の部屋から廊下に出た。

【――地下室の階段を下りると鉄格子があった】

（さつきから浮かんでくる文章は、一体何なの……？）

不穏な言葉が浮かんでは消えていく。

「地下室に鉄格子だなんて……あるはずないわよね？」

普通のお屋敷には、鉄格子なんてない。

けれど、いても立つてもいられない。

だって【鉄格子】の先で【メリアーナ】は【ディアン】とともに……

「鉄格子の先で……何？」

私は、何かに誘^{なや}われるように、ふらふらと夫婦の部屋から出た。

階段を下りて一階に着くと、廊下の向こうにオレンジ色の明かりがゆらゆらと浮かんでいた。

誰かが、ランプを持って歩いているようだ。

（こんな時間に見回りかしら？）

相手に気づかれないようそっと近づいてみれば、明かりに照らされた二つの人影が浮かび上がる。一人はこの屋敷に来たときに挨拶した侍女長。そしてもう一人は、ディアンの義理の息子ラディ

ルだ。遠い親戚から引き取って養子にしたと聞いている。

侍女長とラディルは、まだ私に気づいていない。

――二人の会話に耳を澄ます。

「坊ちゃん、私はこれ以上近づくことができそうにありません」

「わかっている。でも、呼んでいるんだ。熱が出ちゃって苦しんでいるんだよ。お父さまはまたお仕事に行っちゃったし……僕が責任を取るから鍵を開けてよ！」

結婚式で見たラディルは、天使のように愛らしかったが、妙に大人びて見えた。

けれどラディルは今、興奮しているのか第一印象を覆すような大声を上げている。

私は引き続き、二人の会話に耳をそばだてる。

「旦那様には、地下室に近づかないように命じられていますが……」

「大丈夫。鍵さえ開けてくれれば、僕が見てくるから」

「……申し訳ありません。坊ちゃん」

侍女長の手には鍵の束が握られている。

「……子ども、熱がある？」

侍女長の手はひどく震え、その顔が蒼白であることはランプの光でもはっきりとわかった。まるで、何かに怯えているようだ。

（この先に【あの子】がいて苦しんでいる？）

あの子とは一体誰なのか、考えても記憶にモヤがかかっているようでわからない。

それでも私は強い衝動に突き動かされるように走り出し、ラディルと侍女長に近づいた。
「私に貸してちょうだい！」

私は侍女長から鍵の束を奪い取り、そのうちの一つの鍵を鍵穴に差し込んだ。

「お……奥様!? どうしてこちらに！」

「熱があるのでしょうか？ 放っておけないわ！」

鍵穴はさびているのか、まわすとギギギ……と軋みながら開く。

そこには石造りの階段が現れた。階段は下へと続いている。

（あつた——地下室の入り口）

私の口から、小説の一場面と思われる一文が紡がれる。

「地下室の階段を下りると鉄格子があつた」

「奥様……どうしてそのことをご存じなのです」

「……ごめんなさい。私にもわからないの」

先ほど、ディアン様に指示されたのは『俺』と『地下室』に近づくな……その二つだけ。

たった二つの約束すら守れなければ、この家での扱いは悪くなるだろう。

見なかったことにして部屋に戻るほうが、賢い選択なのかもしれない。

「でも……この先に、あの子がいるのなら」

脳裏に蘇るのは、夜空に浮かぶ月のような銀色の髪と、真夜中の空のような漆黒の髪。

先ほどから不安そうな顔をしているのは、銀色の髪の少年ラディルだ。

（もう一人は、この先にいる）

ラディルとお揃いの金色の瞳……外見の差異は髪の毛の色だけ。

【メリアーナは激怒した。まさか、まだ子どもを隠していたなんて】

「普通は、怒るわよね……夫にこんな隠しごとをされたら」

なぜこの先に子どもがいると思うのか、しかもなぜ容姿まで知っているのか理由はわからないけれど、間違いなくこの先にいるのだ。私は必死だった。

「奥様！ この先に行つてはなりません！」

「すべて私の責任だと報告していいわ」

「メリアーナさま！ この先はだめだよ！」

ラディルが私のことを呼んだ。

でも、どうしてもこの先に行かなければならない——あの子を助け出すのだ。

もう、それしか考えられなくなっていた。

階段を駆け下りる。動きに合わせて、鍵の束がジャラジャラと音を立てた。

この鍵があれば、あの子を助けることができる。私はただそれだけを思い階段を駆け下りた。

【階段を下り切ると、目の前に鉄格子があつた】



「本当に……あった、鉄格子」

何度も不思議な文が浮かんでは消える。

けれど、この先の光景は【小説】には書かれていなかった。

そこに書かれていたのは、魔力のコントロールができない【
】は、地下室に閉じ込められていたという事実だけだ。

「なに……これ……」

なんて奇妙な組み合わせだろう。

鉄格子の向こう側には、子ども部屋がある。水色やクリーム色の色合いの可愛らしい内装だ――
鉄格子の中では、五歳くらいの男の子がぐったりとベッドにもたれていた。

「大丈夫!？」

私の声に気がついたのか、彼は潤んだ瞳を私に向けた。

彼は先ほど脳裏に浮かんだとおり、黒髪に金色の瞳をしていた。

――その瞳を見た瞬間、私の中に誰かの記憶が勢いよく流れ込んでくる。

小説の表紙には黒髪と銀髪の美貌の男性が二人描かれている。

「タイトルは【ロレンツ家の双子】」

記憶を辿れば、黒と銀、そして金色が印象的な表紙と、小説の本文が浮かぶ。

【揃いの金色の瞳に月光と闇のような髪を持つ双子の名は――】

「――双子の名は【ラディル】と……【リセル】」

私は記憶を辿り、何度も読み返した小説の冒頭を思い出した。

――物語の始まりは、幼い双子がこのロレンツ侯爵家に引き取られるところから始まる。

【光属性の魔力を持つ兄はロレンツ侯爵家を継ぐために】

それが、結婚式に参加していた銀髪の少年、ラディル・ロレンツだ。

【闇属性の魔力を持つ弟は危険だからと監視するために】

つまり、この先で熱を出して苦しんでいるのが、リセル・ロレンツに違いない。

【引き取られて一ヶ月後、双子はある女性と出会う】

――その女性は、淡い茶色の髪と淡い紫色の瞳をしていた。

社交界で悪女と呼ばれていた彼女は、ディアンの妻としてこの家に嫁いできた。

「それが私……双子の継母、メリアーナ・ロレンツ」

リセルが顔を上げて、こちらをじっと見ている。

その息は荒く、とても苦しそうだ。

鉄格子さえなければ、普通の子ども部屋に見えなくもないが、地下室はジメジメしていて寒かった。

「まるで地下牢ね……待っていて、今鍵を開けるわ」

私は鍵穴に鍵を順番に差し込んでいった。

身を縮めて小さな扉をくぐると、私はリセルのもとに走り寄った。

額に触れば、焼け付くような熱さだった。

「――ひどい熱」

「……誰？」

その声は掠れていた。記憶を辿る……確か、リセルはまだ五歳のはずだ。

こんな小さな子どもが、地下牢に閉じ込められていることに、私は戸惑いとともにひどい憤りを感じた。

（ディアン・ロレンツ……初夜に妻を放置した上に、子どもをこんなところに閉じ込めるなんて、本当にひどい人ね！）

――そのとき私の脳裏に、小説とは別の記憶が流れ込んでくる。

『幸せのお裾分けだよ』

寂しくて泣いている子猫に子ウサギがバスケットを差し出した。

そのバスケットにはたくさんのお菓子が詰め込まれている。

『ずっと一緒にいよう。僕たちは今日から家族になるんだ』

——それは、前世の私が最後に描いた絵本だ。
猫とウサギの仲間たちは種族が違うのに、と不思議がる。

だが、二匹は出会い、お互いを好ましく思い、つらい気持ちをわけあって、家族として仲よく幸せに暮らしていくのだ。

前世の私は、絵と物語で子どもたちを笑顔にしたいと願っていた。

入退院を繰り返し病院のベッドで過ごすことが多かったが、家族は毎日のように病室を訪れ、笑顔を向けてくれた。

ようやく絵本作家になるという夢を叶えた矢先に持病が悪化し、三十年という短い生涯を終えた。だから、前世の私の著作は少ししかない。

今浮かんだ物語は、私が最後に描いたものだ。

出版する前に私の命の炎は燃え尽きてしまったが……

「生きている。メリアーナ・ロレンツとして新しい生を受けて」

今世の家族は、魔力を持たずに生まれた私に興味を示すことはなかった。

それどころか、蔑み、笑いものにし、高齢の高位貴族に後妻として売ろうとした。

だから、記憶を取り戻すまでの私は、家族の愛なんて知らずにいた。

（でも、今は違う）

「リセル・ロレンツ」

名を呼ぶと、リセルがうつすらと目を開いた。

美しい金色の瞳——小説の中の悲しい悪役だった彼は、まだたった五歳の子じもだ。

誰にも見向きもされずにいた幼い私【メリアーナ】と【リセル】の境遇が重なる。

（大丈夫……これからは、私がそばにいるからね）

その言葉は、リセルへ向けられたものであると同時に、この世界で生きてきた幼いころの私に向けられたものだったかもしれない。

俯いていた少女【メリアーナ】が顔を上げ、今の私に微笑みかけた——気がした。

不思議な経験だった。確かに私はメリアーナ本人だが、前世の記憶を取り戻したせいなのか、記憶が朧気だ。

だが、不思議なことに嫌な気持ちはしなかった。

そこで私は部屋の中を見回した。

（異様な光景だわ。磨き上げられた調度品、毛足の長い絨毯、可愛らしい壁紙、どれもこれも上質だけれど……鉄格子の中にあるなんて）

だが、この屋敷には同じ造りの子ども部屋が、もう一つあることを私は知っている。

「リセルの部屋は、ラディルの部屋と同じ造りなのね」

「……どうして、僕の名前を……知ってるの？」

リセルは、それだけ言うとはどく咳き込んだ。

「私は、あなたたちの母親になるためにここに来たの」

「はは……おや……？」

私は熱を帯びた小さな身体を抱きしめた。

地下室に閉じ込められた小さな子ども——彼はまだ悪役ではない。そして私もまだ、小説の中の【継母メリアーナ】ではないはずだ。

【暴走したリセルの魔力は地下室を崩落させ、義理の父母、ディアンとメリアーナの命を奪った】

小説の序盤で、その死が描かれる継母——それが私、メリアーナ・ロレンツだ。

リセルの部屋には鏡がある。

そこに映る私は、淡い茶色の髪の毛に紫色の瞳をした気の強い印象の美女だ。

小説の中の【メリアーナ】は贅沢ぜいたくさんまい三昧の生活をしていた。しかも【リセル】が地下室に閉じ込められていることを知ってから、放置し続けた。

小説を読んだときには、ラディルとリセルを受け入れなかった【メリアーナ】の死には同情すらしなかった。

けれど、実際に経験すれば話が違う。たった十九歳で一人この家に興こゝろ入れし、初夜から夫に突き放されれば自暴自棄になるのだって頷ける。

——殺されないためには、死亡フラグであるリセルから距離を取るのが一番だ。

（でも、前世の私が、小さな子どもを見捨てて自分だけ助かるなんて、嫌だと言っている）

子どものころ、誰にも見向きされなかった【メリアーナ】が不憫だと。【リセル】はあなたと同じなのだと……

『みんな笑っていてほしい。どうか私の絵本がみんなを笑顔にしてくれますように』
前世の願いは、記憶を取り戻すと同時に、私の誓いになっていた。

——足音が聞こえる。

侍女長が階段を降りてきたのかもしれない。でも、どうして侍女長は、あんなにも怯えていたのだろう。

（なんとなくだけれど、ディアン様の命に背くからというだけではない気がする——でも、ほかにどんな理由があるの）

彼女が来たら、詳細を聞くことができるだろうか。

「リセル……大丈夫。熱が下がるまで、一緒にいるからね？」

【魔力のコントロールができないリセルは、義理の父ディアンに地下室に閉じ込められていた】
小説の内容が、蘇ってくる。

こんな小さな子が、大人がそばにいない状況で地下に一人で閉じ込められているなんてどう考えても異常だ。

「ここにいちゃ、だめだよ」

「どうして？」

リセルは無表情のままそう言った。

「僕が悪い子だから……ここにいたら、メリアーナさまも僕のこと、嫌いになっちゃうの」
無表情だったリセルの目に涙が溜まった。

（リセルはまだ五歳、誰かが自分のことを嫌いになってしまうなんて、不安に思わなくていいはずなのに）

「——あなたは、悪い子なんかじゃないわ」

「ううん……僕、魔力がコントロールできない悪い子だからここにいるの。みんな怖がって調子が悪くなっちゃうんだ」

リセルは熱に浮かされるように、そう口にした。

その目から涙がポロリとこぼれ落ちた。

何かに怯えるような言葉を聞いた瞬間、私の心は決まった。

この子のそばにいる——私がこの子の家族になる。

胸の中に湧き上がるのは、強い憤りと決意だった。

こんな小さな子どもが、暗い地下室に閉じ込められて一人で過ごしている。

自分が悪いからだと思い込まされている。その状況が許しがたかった。

「あなたのせいじゃない！ 絶対に違うわ！」

思わず大きな声を出してしまった。そのときだった。

「あの……リセルを怒らないで」

後ろから、叱られることを恐れているような声が聞こえてきた。

あまりの剣幕に、私がリセルを怒っているのかと思わせてしまったようだ。

「ラディル」

私は立ち上がって、振り返る。

ラディルが、怯えを含んだ視線を私に向けている。

「侍女長のことも怒らないであげて。僕が無理に頼んだんだ」

大きな金色の瞳と長いまつげ……揃ってみれば、ラディルとリセルは髪の色が違う以外、完全に同じ姿だ。

侍女長がひどく青ざめながら一步前に歩み出た。

（顔色が悪いどころか、震えている？）

私に怒られることを恐れているのだろうか？ それにしては様子がおかしい。

「……奥様、リセル坊ちゃんはお風邪を召していらっしやいます。どうかお許しください」

侍女長があまりに震えているものだから、私は気の毒になってしまった。

どうしてこんなに怯えているのだろうか……私が大きな声を出したからなのだろうか。

（違うわ。彼女は怯えていた。私が声をかける前から）

彼女を安心させるように、優しい声で話しかける。

「あなたは何も悪くないわ。お願いを聞いてくれるかしら？　すぐに氷と水、それから布巾ふきんを持つ

てきて。それから、温かい飲み物も」

「……え？」

「ブランケットも薄すぎるわ。私の部屋から羽根布団を持ってきてもらえる？　そして、朝になったら子ども向けの熱冷ましを買いに行ってちょうだい」

私はそう伝えると、椅子を持つてきて、ベッドのそばに座った。

「奥様……まさか自らお世話されるおつもりですか？」

侍女長の声には、やはり怯えが混じっている。

「小さな子どもが熱を出しているのよ。当たり前じゃないの」

「恐ろしくなったり、気分が悪くなったりしないのですか？」

「え？」

私は改めて、リセルのことを見つめた。

どこをどう見ても、風邪を引いてしまった可哀想な子どもだ。恐ろしいわけがない。

なぜそんなにも侍女長が怯えるのかは、やっぱりわからなかった。

（何……？　もしかして、思い出せていない設定があるのかしら）

この世界に生まれ変わり、メリアーナとして生きてきたことと、この世界が【ロレンツ家の双子】の小説に酷似していることはわかったが、すべてを思い出せたわけではない。

時々、ふと浮かぶ小説の文章だけが頼りだ。

不可思議な状況なのは確かだが、無理に思い出そうとするより、今はリセルの看病が先だ。そう

決めて、もう一度侍女長に向き合う。

「私が頼んだこと、できるの？　できないの？」

侍女長は、我に返ったように背筋を伸ばした。

彼女は、私が命じたことを遂行することにしたのだろう。

「申し訳ありませんでした。少々お待ちくださいませ」

侍女長はすぐに踵^{きびす}を返し、階段を駆け上がったといった。

——それにしても、恐ろしいとは一体何のことなのか。

不思議に思いながら再びリセルに視線を向ける。

「具合が悪かったのに、大きな声を出して驚かせてごめんなさいね」

「メリアーナさま……本当に大丈夫なの？」

「大丈夫よ？」

先ほどから私のことを名で呼んでくるが、リセルと私は今が初対面だ。

リセルはなぜかディアン様と私の結婚式にすら参加していない。

「リセル。あなたに会うのは初めてのはずだけど、どうして私の名前を知っているの？」

「だって、ラディルから聞いたもの」

「ラディルから……？」

【二人には不思議な力があつた。口にしなくても互いの考えを共有できるのだ】

(そう、ラディルとリセルは、そばにいるときには、お互いの考えがわかる不思議な力を持っている……)

ラディルとリセルは心を通わせることができる双子だ。新しく家に来た継母のことだって、情報共有していたはずだ。

「メリアーナさま？」

ラディルとリセルの声が、重なった。

小さな体、大きな目、ふっくらした頬。二人はとても可愛い。ラディルとリセルは遠縁の子どもだというが、ディアン様にもよく似ている。

——それにしても、初夜で妻をないがしろにして恥をかかせた上に、いたいけな子どもまでこんな場所に閉じ込めるなんて……

夫の言葉にショックを受けて、幼いラディルに関わりたくともせず、リセルが閉じ込められていることに気がつきもせず、気づいた後もないものとして興味を示さず、ドレスや宝石を毎日のように買って贅沢したり夜会に出掛けたりしていた小説の中の【メリアーナ】にも腹が立った。けれどそれと同時に、自分自身のことながら不憫に思った。

前世の私は、三十歳でこの世を去った。その人生は、確かに短かったが……家族たちは親身になって私のそばにいてくれた。

(メリアーナは、家族から愛されずに育った)

十九歳で嫁いできて夫に冷たく突き放された【メリアーナ】を責め切ることもできない。

それに小説の展開と違い、私はまだラディルやリセルに冷たくしていないし、夜な夜な遊び歩いてもいい。家族としての絆を育むことができるはずだ。

しかも、前世の私は【ラディル】と【リセル】に同情するとともに、心惹かれていた。

あんなに好きだったキャラクターの子ども時代。

子どもにとって、母という存在はとても大切だ。

(もしも、意地悪な継母が優しい母親になったなら——何かが変わるかしら)

もしかしたら、彼らの悲劇的な結末を塗り替えられるかもしれない。

(どこまで小説の内容を変えられるかはわからない。それでも、幸せな子ども時代だったと振り返ることはできるはず——義理の父親が最低であることを差し引いても)

ディアン様が帰ってきたら、どうしてリセルを閉じ込めて放置しているのか絶対に説明してもらおう。近づくなと言われていたけれど、説明してもらえらるまで食い下がるのだ。

——私は、心に誓った。

自分に魔力がないことを卑下して、すべてを諦めた【メリアーナ】はもういない。

(そもそも、魔力の量でその人そのものを否定するというこの世界が理解できないわ)

前世の記憶の影響で、価値観が塗り替えられてしまったようだ。

この考え方が、この世界では少数派であることは重々理解しているが……

「今は熱を出しているリセルのお世話が先ね」

黒髪を撫でていると、リセルが再びうつすらと目を開いた。

彼はしばらくの間、私のことを見つめ、それから唇を震わせる。

「ねえ……本当に僕と目を合わせても怖くないの？」

その目は熱のせいか、不安のためか潤んでいた。

そっと手を握ると、小さな体が緊張して強張った。

もしかすると、閉じ込められる以外にもひどい目にあってきたのかもしれない。

私はリセルを安心させるために、軽く笑った。

「……何を言っているの？　こんなに可愛らしい子と目を合わせて怖いはずないわ」

「本当に？」

先ほどから私の周りをうろうろしていたラディルと、リセルの声が完全に重なった。

リセルの熱が高いから彼を優先していたが、ラディルも同じくらい不安そうな表情を浮かべている。

「ラディルもこちらにいらつしゃい」

「——いいの？」

「もちろんよ」

私はラディルのことを引き寄せて、ギュッと抱きしめる。

まだ五歳の彼の体は、細く小さかった。ラディルは抱きしめられると、身体をギュッと緊張させた。——嫌な予感が膨らんでいく。リセルだけじゃない。ラディルも抱きしめられた経験がほとんどないのかもしれない。

「ねえ、リセルのこと怖くないの？」

「どうして、リセルが怖いなんて」

「だって、リセルは……」

ラディルが腕の中で身を振り、顔を上げた。

リセルとお揃いの金色の瞳は、完全に潤んでしまっている。

「私は怖くないけれど——ラディルは、リセルのことが怖いのか？」

「怖くなんてない！　僕にとつてリセルは誰よりも大事な弟だ！　それに僕の魔力は光属性だし、

僕らの魔力の強さはほとんど同じだから、リセルの魔力に影響を受けないんだ」

「魔力の影響……？」

【リセルは闇属性の魔力のために周囲から忌避された。幼い頃から、彼にはラディルしかいなかった】

「あ……」

ラディルとリセルは仲がいい双子だった……二人は不思議な魔法で繋がっていて、近くにいるとお互いの気持ちや考えを理解できた。

だが、ラディルは光属性の魔力、そしてリセルは闇属性の魔力。

持つて生まれた魔力の属性が二人の運命を決定的に分けてしまうのだ。

「……寒いよ」

その声に、私は我に返る。

リセルは熱が上がってきたのだろう、震えている。

「ラディル、お話はまたあとで聞かせてね」

「うん……」

私はラディルから離れた。

子ども部屋には絨毯が敷かれているが、鉄格子の向こうは石畳となっている。ひんやりとした空気が充満しているようだ。

「……ここは寒いわね。私の部屋に移動しましょうか」

「それはだめ」

ラディルの声は、妙に無機質だった。

「ラディル？ どうしてなの？」

問いかけたが、ラディルは黙り込んでしまった。

するとリセルが口を開く。

「だめだよ。僕はまだ魔力のコントロールができないからここにいないと」

「リセルまで……」

この場所は寒い。無理にでも私の部屋に連れていったほうがいいだろうか……

けれど、ラディルとリセルの表情は、あまりに深刻だ。

小説の中で語られていたリセルの閥属性の魔力の影響が、どこまであるかもわからない。

(……侍女長があれほど怯えていたのは、私やディアン様に叱られるかもしれないと思ったからじゃなくて、リセルの魔力の影響だったのね)

私は、リセルを連れ出すことを諦め、この場所で看病することに決めた。

「わかったわ。その代わり一緒にいるからね」

リセルはこの部屋から出ることができない。

けれど、わずか五歳の子どもがこんな場所に一人でいるなんて許し難い。

(もつとできることがあるはず……リセルのことを一人にしたくない)

私はしばらくの間考え込み、結論を出した。

「いいわ——今日から私もこの部屋で暮らすわ！」

パサッと何かが落ちる音がした。振り返ると、侍女長が目を見開いてこちらを見ている。音は驚いた彼女が、持ってきた布団を落とした音だった。

彼女は怯えながらも、水や食べ物、寝具を持って来てくれたようだ。

リセルの魔力がどれほどの恐怖を人に与えるのか、私にはわからない。でもたぶん、彼女は子どもを放っておくことができない信頼のおける人だ。

「侍女長、朝になってからでいいから、使用人たちに指示をして私のベッドも運んできてちょうだい」

「奥様……」

「ディアン様から地下室に入るお許しをいただけなかったのは私だけかしら？」

「私どもは……交代でリセル様のお世話をしております」

「まったく近づけないわけではないのね」

「魔力がコントロールできていないときには、近づかないように命じられていますが」

「もしかして……熱を出しているから、コントロールできないのかしら？」

不思議だ。私にとっては、熱を出した不憫な子どもでしかないのに……

侍女長の顔色がどんどん蒼白になっていく。

あまりここに引き留めるのは、よくなさそうだ。

「ディアン様から、お叱りを受けるのは私よ。だから、私のわがままを聞いてちょうだい」

「けれど奥様にどんな影響があるか」

侍女長は青ざめて震えていた。やはり彼女は、主人に叱られるのを恐れているのではない。私のことまで、心配してくれているのだ。

——でも何も感じない。魔力が原因なのだとすれば、思い当たることは一つしかない。

（私には……魔力がまったくないから、影響を受けない？）

私は、侍女長に微笑みかける。

「女主人として命じるわ。私がここで過ごせるように協力しなさい」

「かしこまりました」

侍女長の瞳が潤んでいたのは、見間違いではないだろう。それは恐怖ではない、安堵したせいだ。彼女はやはり、情が厚い人物なのだろう。

「セイラ。ありがとう」

私はこの屋敷に来たときにディアン様から聞いた侍女長の名を呼んだ。

彼女は驚いた様子だった。そして恐々（こわこわ）と質問してくる。

「あの、奥様……本当にお体は大丈夫なのですか」

私はしばらく考えたが、やはり何も感じないという結論に達する。

長期間一緒にいたときの影響はわからないが……小説の展開通りに物事が進むのなら、どうせ死んでしまう運命なのだ。

あまり考えすぎても身動きがとれなくなるだけだろう。

「私は魔力がまったくないから、そのせいかもしれないわ」

「そうでしたね……本当に影響がないならいいのですが」

セイラは、軽い笑みを浮かべた。

私に魔力がないことを聞いたのに、彼女の表情から蔑みは感じられない。

「では、もしかすると旦那様のことも……」

「え？」

「いいえ、確証がないことを申し上げるわけには参りません」

セイラはなぜか言葉を濁した。

私が知らない秘密が、まだあるのだろう。

そのことを聞いただそうとしたとき、ラディルが抱きついてきた。

「メリアーナさま……僕も一緒にいたい！」

美しい金色の瞳がキラキラと輝いている。

セイラをはじめ、使用人たちは皆親切なのだろうが、ラディルもまた家族と呼べる存在がない日々を過ごしていたのだ。

（か……可愛い！　なんて可愛いのか!?）

上目遣いにこちらを見るラディルはあまりに可愛い。

もしかしたら、双子の兄弟ラディルとリセルの悲劇を避けることができるかもしれない。

そもそも二人が離ればなれになった原因は、【メリアーナとディアン之死】なのだ。

私とディアン様が死ななければ、二人が幸せになれる可能性は、まだあるはずだ。

（んっ、でも薄情な夫は除いてもいいかしらね……）

初夜で自分のことを放置した冷たい夫のことを思い出す。

私はラディルに微笑みかけ、彼の頭を撫でた。

色は違っても、ラディルとリセルの髪質は同じようだ。

サラサラと柔らかく、愛しさがこみ上げてくる。

「これからは三人ですつと一緒にいましょう。でも今夜はだめなの。風邪がうつるかもしれないから……ラディルはリセルの熱が下がったら一緒に寝ましょうね？」

「うん！」

ラディルが天使のような笑みを浮かべる。こんな可愛い子どもを愛でられる機会を与えられながら、やけになって遊び歩いていたなんて――

けれど結婚しているといっても【メリアーナ】はまだ十九歳だった。前世は三十歳近くまで生きていたからこそ思う……彼女だって、まだ守られてもよいはずの年齢だった。

（本当に――ゆるせない!!）

私は再び最低夫への怒りを募らせるのだった。

鉄格子の向こうでラディルが大きく手を振る。

「リセルの風邪が治ったら、絶対に一緒に寝てね〜！」

（天使……!!）

私は口元がにやけそうになるのを抑え込みながら、軽く手を振った。

「もちろん、約束するわ。おやすみなさい、ラディル」

「うん……！　おやすみなさい、メリアーナさま！」

ラディルはセイラに連れられて、足取りも軽く地下室から去っていった。

本当に可愛らしい。これから一緒に過ごせることが、楽しみでしかたがない。

二人が去ると、私は再びリセルに視線を向けた。

寒気は治まってきたようだが、頬が紅潮し息も荒くとても苦しそうだ。

「今までも風邪を引いたときは、たった一人で苦しんでいたの……？」

リセルの額の汗を拭っているうちに、目が潤んでしまった。

こんなに小さな子どもなのだ。本当は、もっと甘えてわがまを言ってもいいはずだ。

それなのにリセルは、自分のことよりも私のことばかり心配していた。

「これからは、いつも一緒にいるからね……」

もしかしたら小説の展開は変わらず、私は薄情な夫とともにリセルの魔力暴走に巻き込まれて死んでしまうかもしれない。

（でも、不確実な未来に怯えて小さな子どもを放置するよりずっといい）

ラディルとリセルから距離を取るのではなく、何が起ころうと一緒にいるのだ。

——だって、私たちは家族になるのだから。

絵本作家だった前世の私にとって、子どもたちを笑顔にするというのは人生をかけた願いだった。

「そういえば、小説の中でリセルが笑ったのは、ラディルに殺される直前だけだったわね……」

その場面を読んだとき、前世の私は号泣した。

今でも思い出すだけでつらくて仕方がない。幼いころから苦しんできたリセルには、もっと別の場面で笑ってほしかった……

こぼれそうになった涙をグッと堪える。

「メリアーナさま……」

リセルはうなされながらも、私の名を呼んだ。

「大丈夫、そばにいるからね」

私にできることなんて、ほとんどない。でも、そばにすることができなのが、私しかないのなら……ただ、そばにいる。

額を冷やし、頭を撫でているうちにリセルは眠ってしまった。

「よかった、少し楽になったみたいね」

スヤスヤという寝息が聞こえてくる。

熱も下がってきたようだ……

「——それにしても、こんな場所にあるにしては、しっかりした造りよね」

私は立ち上がり、部屋の様子を確認することにした。

戸棚を開けると冷気が吹き出した。中には飲み物が入っている。

「保冷のための魔道具？ とても高価なのに、子ども部屋に置いてあるなんて」

ロレンツ侯爵家が裕福であることは知っていたけれど……

小さなテーブルと椅子もある。

リセルが痩せ細っている様子もないから、食事だってきちんと与えられているのだろう。

続いて、私は本棚を確認した。

本がぎっしり詰まっているが、どれもこれも貴族の子どもが学ぶためのものだ。

「やっぱり、絵本やおもちゃがないわね……」

机に近づくと、そこにはリセルが描いた一枚の絵があった。

黒一色のその絵には、ラディルとリセル、それから両親らしき二人が描かれている。

(ラディル以外の人の顔が、黒く塗りつぶされている……)

悲しい絵だ……きつとこれは、リセルが押し隠した悲しみや苦しみを表しているのだ。

「……もつと甘えて、自由にわがままだって言って、笑ってほしい」

もしも、この絵の中に私の顔が加わったなら双子の運命が変わるのでは……そんなふうに考えるなんて、樂觀すぎるだろうか。

そもそも、小説の通り私は初夜に夫であるディアン様に冷たく突き放されてしまった身の上だ。

「もし運命が変わらないとしても——放ってなんておけない」

この世界では貴族の子どもたちは四歳くらいになると子ども部屋で眠るようになる。

ラディルとリセルはもう五歳になったけれど——家族と一緒に過ごす日々を送っていないのだから、しばらくの間私と一緒に寝てもいいはずだ。

「リセルの風邪が治ったら三人一緒に……」

リセルの眠るベッドの横で椅子に座る。

眠っている姿は、やはり天使のように愛らしい。

「みんなで幸せに、なるの」

それは幼い二人だけではなく、まだ十九歳の【メリアーナ】に向けられた言葉でもあった。

温かい子どもの体温とクウクウという穏やかな寝息を聞いているうちに、私も眠りに落ちていった。

* * *

当たり前のようにつけられる優しい言葉。

私への蔑みなんて欠片も見せずに向けられた、少し不器用な笑み。

大切な宝物のような思い出に漂うのは、穏やかな新緑の香りだ。

その香りを頼りに記憶を辿っていけば、薔薇が咲く庭園に彼がいる。

私より、少し年上の男の子。手を伸ばせば、あと少しで届きそうなのに。

何度も夢に見た光景。

——これは、私の幼い頃の記憶だ。

目覚めると忘れてしまっているのだとしても……

目を覚ますと、私の肩にはズシリと重い布がかかけられていた。

漂うのは——夢の中で嗅いだ、新緑の香りだ。

(この香り、誰にも相手にされず泣いていたときに漂っていた……いつだったかしら)

「ディアン様——」

そこで急に覚醒する。懐かしさの代わりに浮かぶのは、嫌悪感だ。

(……は？ なぜ、最低夫の名前なんか呼んだのかしら)

初夜での私への態度、さらにはリセルに対する仕打ち。

寝ぼけていたからといって、そんな男の名を呼ぶなんて腹立たしいことこの上ない。
私は思わず眉根を寄せる。

目の前には、リセルが眠っていた。

リセルの熱が気になり、思わず額に手を当てる。

「下がったみたいね」

「そばにいただけでなく、触れることもできるのか……？」

驚きを交えた声が聞こえた。

顔を上げると、ディアン様が壁際で立ったままこちらを見ていた。

（……私に近づくなと言っておいて、なんでいるのよ！）

もしかすると、禁じられていたにもかかわらず地下牢に来てしまったことを咎められるのではないかと一瞬身構える。

（ううん！ 咎められたなら、どうしてリセルをこんな目に遭わせたのか聞いたですわ！）

だが、目が合うと、彼は慌てたように私から視線を逸らした。

「君は——リセルが怖くないのか？」

彼が口にした言葉は、私が予想した内容とは違った。

「怖くなんてありません。どうして子ども相手にそんなことを」

立ち上がると、肩にかけられていた布がバサリと音を立てて床に落ちた。

拾い上げてみるとそれはディアン様のマントだった。

冷えていたから、気を遣って自身のマントを私にかけてくれたのだろうか。

（でも、初夜で妻に心ない言葉を投げかけるような薄情な夫がそんなことをするかしら？）

私は不思議に思いながらマントを持って、ディアン様に歩み寄る。

彼は顔を背けたまま口を開いた。

「近づかないでくれ」

その言葉に憤慨して、私は逆に彼との距離を詰めた。

「大事な話があるのです。離れたままでは話すことができません」

「大事な……話？ いや、それより君は、俺に近づいても……」

「近づかれるのがそんなにお嫌なのですか？」

私は、ディアン様に腹を立てながら彼の顔を見ようと回り込む。

しかし、よほど目を合わせたくないのか、彼は俯いてしまった。

「本当に大事な話なんです。せめて目を合わせてください」

「そんなに近づいて、気分が悪くなったり恐怖で身がすぐんだりしないのか……？」

「恐怖って？ そんなことよりリセルの……」

そのとき、ディアン様がゆるゆると顔を上げた。

彼の瞳は美しく輝いていた。リセルとラディルと同じ金色——まるで夜空に浮かぶ月のようだ。

（この瞳をどこかで……見たことがある？）

彼の瞳に浮かんでいるのは、明らかな戸惑いだった。

でも、やっと目を合わせてくれたのだ。リセルについて話すなら今しかないだろう。

私は彼の様子を訝しく思いながらも口を開いた。

「どうしてリセルを地下に閉じ込めているのですか？」

「魔力が暴走したら危険だからだ」

ディアン様は、表情も変えずに即答した。

彼の眉間のしわが、不機嫌さを表すように深くなる。

(リセルのことを心配して来たのかもしれないと思ったけれど……)

「こんな地下牢みたいな場所でも！」

いくら体裁を整えたって、こんな鉄格子の向こう側なんて、まるで牢屋みたいだ。

それなのに、ディアン様は私の言っていることがわからないというように軽く首をかしげた。

「なぜ君はそんなに怒っている？ 魔力が暴走する可能性のある子どもが、コントロールできるようになるまで隔離されるのは当たり前のことだろう？ ここは一番安全で最適だ」

「……は？」

あまりのことに、私は言葉を失った。

魔力が暴走したら危険だということは理解できる。【ロレンツ家の双子】では、リセルは魔力暴走により地下室を崩落させてしまったほどののだ。

それでも、子どもをたった一人でこんな場所に置いてよい理由にはならない。

「お言葉ですが……！」

「まって、メリアーナさま！」

ディアン様に文句を言おうとしたとき、可愛らしい声が地下室に響き渡った。

「リセル……」

リセルはベッドから起き上がり、こちらに視線を向けていた。

「お父さまが言っていることが正しいよ。だって僕は家族を……」

リセルの金色の瞳が光を失う。その直後、天井がピシリとひび割れるような音を立てた。

「僕が——家族を——僕は、悪い子」

「……っ、リセル、落ち着け」

「リセル……？」

リセルの瞳からは光が消えていた。小さな子どもがこんな表情をするなんて……私は強い衝撃を受ける。

「僕の……僕の魔法のせい……家族を傷つけちゃった……みんな僕のこと、悪い子だって」

その声は五歳の子どものものとは思えないほど絶望に満ちていた。

何があったかはわからないが、リセルは過去の出来事でとても傷ついているのだ。

できることは何かと考える前に、私の体はリセルのことを抱きしめていた。

「リセル！ リセル、大丈夫よ！ あなたのこと、怖くなんかない！」

「やだ！ メリアーナさまも僕のこと怖くなっちゃう！ 嫌いになっちゃう！」

強く抱きしめると、床が揺れ、天井がさらに大きくミシツと鳴った。

(天井が……崩落する……？ 逃げなきゃ！ でも、でも……こんなに怯えている子どもをひとりぼっちになんてできない……！)

「嫌いなんて、なるはずない！」

「メリアーナ……！」

——風が吹いた。ミシミシという音が消えて室内に静寂が訪れる。

泣きそうな声が聞こえた。けれどそれは、リセルのものではない。

リセルを抱きしめたまま振り返れば、ディアン様が切なそうに顔を歪めていた。

「ディアン……様……？」

「君は……」

けれど、彼は軽く首を振るとすぐに表情を改めた。

「いや、今はリセルが先か。……リセル。大丈夫だから、眠れ」

ディアン様が、私とリセルに近づいてきた。

「——お父さま、怖いよ」

光を失ったリセルの金色の瞳からは、次から次へと涙がこぼれ落ちている。

もう一度、天井がミシリと音を立てた。

ディアン様は、泣きそうな表情を浮かべた。だが、その声音からは、気遣いと優しさがにじみ出ているようだった。

「君は何も悪くない。君のせいではない……あれは不幸な事故だった」

ディアン様が指先でリセルの額に円と模様のようなものを描いた。

魔力がない私には何も見えないけれど、これは魔術師が大きな魔法を使うときに描くという魔法陣だ。

リセルの体の力が、ぐつたりと抜ける。

私はリセルを抱き寄せながら、ディアン様を睨みつけた。

「リセルに何をしたの！」

ディアン様はもう、先ほどの泣きそうな表情ではなかった。

「魔法で眠らせただけだ。次に起きたときには落ち着いているだろう」

「眠らせた……だけ？」

スヤスヤと穏やかな寝息が聞こえてくる。

本当に眠ってしまっただけのようで安堵する。

「ごめんなさい、勘違いしました……」

「こんな状況でも怯えないとは」

「天井が音を立てたのは怖かったです」

今こそ小説の通りに地下室が崩落するのかと覚悟した。

「天井はそうそう落ちないだろう」

小説では落ちたのだ。冷たく言い放たれば、再び反感が高まる。

「それより、リセルのことが恐ろしくないのか？」

「こんなに可愛いのに、怖いはずないです」

ディアン様が額に手を置いてため息をついた。

「リセルの足元から黒い魔力が噴き出していただろう——よほど強い魔力を持たなければ、恐怖のあまり気を失ってもおかしくないはずだ」

「何も……見えませんでしたし、感じませんでした。たぶん、私に魔力がないから……」

「魔力がないから……?」

魔力がない——幼いころから何度も家族や周囲の人たちから蔑みとともに投げかけられた言葉だ。

(この世界では、魔力は力の象徴)

貴族のほとんどは強い魔力を持ち、一部の者は魔力を使って魔法を行使することができる。庶民であっても多かれ少なかれ魔力を持つ。

魔力を持たない者なんて、数十年に一人しか生まれない。

王家の血を継ぎ、貴族の頂点に位置する公爵家の長女が魔力をまったく持たないなんて、家族にとっては許しがたく、周囲にとっては嘲笑に値することだったろう。

(でも魔力を持たずに生まれたことは、私のせいじゃない……)

私は、魔力こそなかったが日々努力してきた。

学業でも優秀な成績を収めてきたし、礼儀作法だって誰より努力して完璧にできた。

カレント公爵家の手紙は、ほとんど私が代筆していたくらいだ。

でも私の努力が表に出ることはなく、すべて家族の手柄にされた。

魔力をまったく持たないという理由だけで、私の努力は隠されて、周囲の人たちに知らされることはなかった。

家族に無視され、ときに馬鹿にされて育った私は『自分が魔力を持たないから仕方がない』のだと思い込まされていた。

(……そう、誰も私のことなんて見向きもしなかった)

けれど、そう考えた直後、胸の奥で何かが引っかかる。

暗い夜……美しく輝いていた金色の瞳と、優しい言葉。

大切にしていた記憶のはずなのに……どうしても思い出せない。

「メリアーナ?」

その声に我に返る。今のうちに、ディアン様に自分の意見を伝えておかなければ。

「あなたの命令に背いて地下室に近づきましたが、何か罰がありますか?」

「……いや」

「私はあなたの命令に背いたことを反省しています。だから、今日から私もこの地下室で暮らすね!」

夫婦の部屋には行かないという宣言でもある。——ディアン様にとって都合だろう。

反対されようとこれだけは譲るまいと決めて伝えると、ディアン様が真っ直ぐに私を見据えた。

「君がそうしたいなら、好きにすればいい。ベッドを運び込ませよう。リセルが眠っている今なら、使用人たちもこの部屋に入ることができるだろう」

そう言うとディアン様は背を向けた。

（確かにリセルと一緒にいたいと言ったのは私だけど、ずいぶんあつさりしているわね。私と一緒に部屋はそんなに嫌だったのかしら）

「それから今後、リセルとラディルをどう育てるか話したいです。おもちゃや絵本、いえ、足りないものが多すぎます」

ディアン様は、淡々と言葉を続ける。

「侍女長から君が地下室に向かったと報告を受けて駆けつけたが、仕事に戻らねばならない。話は戻ってからしよう」

「……ええ、わかりました」

そこで私は、違和感に気がついた。

彼は筆頭魔術師としての制服を着ているが、何かが足りない。

そう、身につけているはずのマントは今、私が手にしている。

私はマントを、彼に差し出した。

「仕事に行かれるのでしょうか？ マントをお返しします」

「……地下室は冷える。使用人たちが暖かい服を持ってくるまで、羽織っておくように」

「え、でも」

「君まで風邪を引いてしまったら、面倒だ」

その言葉は、私を黙らせるのに十分だった。

（事実だけど、面倒だなんて、もう少し別の言い方はできないのかしら）

私はマントを肩から羽織った——もう一度、新緑の香りが漂う。

「ありがとうございます。それから……いつてらっしゃいませ」

「ああ、いつてくる……」

「戻ったら絶対に話し合いまししょうね？」

「わかった、待っていてくれ」

ディアン様はなぜか切なげな表情を浮かべた。

けれど、それはほんの一瞬のことで、すぐに無表情になったから……私の見間違いだっただけに違いない。